虹の架橋は足利屋・さくらもーるアスクが毎月１日発行する地域新聞です。

虹の架橋

第２９０号
令和元年10月1日発行
企画・編集　松﨑　靖
発行　㈱足利屋洋品店
みどり市大間々町4-1380（〒376-0101）
TEL 0277-73-1212
Fax 0277-70-1066

今月の題字
塚本喜左衛門さん
（滋賀県五個荘町出身）
近江商人の塚本さんは塚喜グループの社長さんでＮＰＯ法人三方よし研究所の理事長さん。数年前にご縁を頂いて以来、三方良しの心を学ばせて頂いています。

ながめで大谷桂三舞踊公演
走れメロス、外記猿など

今年の春、全国芝居小屋会議の会場となった四国旧金毘羅大芝居（金丸座）で中村勘九郎さんと歌舞伎「高坏」で共演した十字屋・初代大谷桂三さんが息子の龍生くんといっしょに、ながめ余興場で初の舞踊公演を開催いたします。

第一部は「走れメロス」。太宰治の名作を大谷桂三さんが息子の龍生くんに読み聞かせで読んでいるうちに、歌舞伎の芝居仕立てに書き下ろした作品です。誰もが知る文学作品を歌舞伎仕立てに表現することで、歌舞伎に馴染みのない方にも、セリフの変化や所作で歌舞伎の面白さを十分に感じてもらえるように工夫をしています。

第二部は清元「鳥刺し」。大谷桂三さんならではの可笑しみや熟練の色気も見どころの一つです。

第三部は長唄「外記猿」（げきざる）。小猿を連れた猿使いが馬の健康を願って猿を舞わせるという縁起物の歌舞伎踊りです。父親の指導で十二歳の長男・龍生くんが「馬が群れる」群馬県の一層の繁栄を願って馬と猿の縁起物をめでたく踊ります。

チケットは足利屋、アスクにも置いてあります。お早めにお買い求め下さい。

十字屋・大谷桂三舞踊公演
日　時　10月14日（祝日）
第1部　11時開演
第2部　14時開演
場　所　ながめ余興場
観劇料　2,800円

小耳にはさんだ　いい話
（文責・靖）
《290》

てんびんの詩（うた）

今年七月にＰＨＰ研究所から漫画版「てんびんの詩」が出版されました。この話は今から百年ほど前、滋賀県五個荘にある近江商人の近藤家の十代目の長男として生まれた大作少年が行商を体験する中で、商人として、人間として成長する姿を描いています。

大作は小学校を卒業した日に父親から「今日から鍋の蓋を売ってみぃ」と鍋蓋三十枚を渡され、行商に出ることを命じられます。てんびん棒を担ぎ、粗末な服を着た大作はまず、近藤家の出入りの人や親戚なら恩や義理で買ってくれるだろうと思って回りますが誰も買ってくれません。皆が大作のことを思って心を鬼にして断ったのでした。三か月経っても鍋蓋は売れませんでした。売ることばかりを考えていた大作は使う人の気持ちも鍋蓋への愛情もありませんでした。ある時、大作は古い鍋や蓋が水辺にたくさん置いてあるのを見つけました。「この鍋や蓋が無くなったら困るやろな、困ったら買うてくれるかもしれん、壊して竹やぶに捨てたら・・・」という考えが頭をよぎりましたが「この蓋も誰かが心を込めて作り、誰かが大変な思いをして売り、誰かが大切に使っているものだ」と気づいて初めて鍋蓋がいとおしく思えてきました。大作が水辺で鍋と蓋をゴシゴシ洗っていると、「おい！人の鍋になにしとる！」という怒鳴り声が聞こえました。大作はそのおばさんに、最初は悪い考えを持ったが鍋蓋がいとおしく思えてきて洗ってやりたくなったことなどを正直に話しました。おばさんはそれを聞いて「おまえさん立派やなァ、買うてあげよう」と言い、近所の人にまで大作の鍋蓋を勧めてくれました。大作は何度も「おおきに」と言っておばちゃんに抱きつきました。

大作はこの日の日付をてんびん棒に書き記しました。この日は大作が商いの素晴らしに気づき、真の商人への道を歩き出した日となりました。

今から三十年前に「商業界ゼミナール」という勉強会で初めて「てんびんの詩」の映画を観て感動しました。「商売はてんびん棒と同じで売り手と買い手のどちらが重くてもうまくいかない」という言葉が今も心に残っています。

世界一小さな足利屋トイレ美術館

今月の詩画《290》

大野勝彦さん『いろはにほへと』

熊本県の義手の詩画家・大野勝彦さんが描いた二〇二〇年カレンダーができました。大野さんは四十五歳のときに農業機械で両手を切断してしまいましたが持ち前の明るさと精神力で美術館を作り、熊本地震などの苦難も乗り越えてきました。大野さんにはお母さんへの愛情が溢れる詩画やエッセイがたくさんあります。最愛のお母さんを亡くして初めての秋、大野さんの目にはこの秋がどう映っているのでしょう。

大野さんの愛とやさしさが詰まったカレンダーは足利屋にもありますよ（税込千五百円）

靖ちゃん日記

令和元年九月十一日（水）

五時起床二十一度、曇り・本店は定休日。掃除仲間の伊藤さんと二人で「貴婦人」を見るために奥日光へ行った。午後から雨の予報だったが、伊藤さんのオープンカーで出かけた。大間々から足尾を通って一時間二十分、昼前に戦場ヶ原の赤沼に到着。自然情報センターで低公害バスに乗り換え、途中で降りて、遊歩道を歩いた。秋風が心地よかった。木立の間から「貴婦人」が見えてきた。貴婦人とは、広大な小田代が原の湿原の中に一本だけ凛と立っている樹齢百年とも言われる白樺の木。吉美門佐一郎さんが描いた油絵や、「一本の木」という写真集を見て、本物を見たいと思っていた。

みんなに「貴婦人を見て感動した」と話したが、知らない人が多かった。貴婦人は人間ではなく、木婦人だと説明した。婦人を不倫と間違えた奴もいた。不倫は見て感動するものじゃねえだろう。

中秋や街並み駆ける人力車

「ゆかたでまま遊び」というイベントを開催しました。スタッフ全員が浴衣姿。イベントテーマは「いま見ておきたい大間々」。蔵人新宇の白壁の蔵や停車場通りにある旧小林眼科洋館なども特別公開してもらいました。

古い町並みを一周する人力車にも人気が集まりました。まちなか交流館で百年前の「引札」などを説明する合間に、私も浴衣美人を誘ってデート気分で人力車に乗りました。普段見慣れている街並みですが、人力車から見たレトロな街並みは魅力的でした。時には上から目線も必要かもしれません。

虹の架橋 ⇧ 検索 で、インターネットからでもご覧いただけます。

第二百九十一号は十一月一日（金）発行予定です。

❤やっちゃんの似顔絵提供：ひさかさん